



第四回長崎学公開講座 第一部発表要旨

長崎は砂糖文化の発祥地 （長崎は遠かった）

脇山 順子

一、長崎は遠かった
かつて長崎では料理を味わった時、自分が想像したものより甘さが足りない場合、「長崎は遠かった」とささやいた。江戸時代、「長崎」という言葉は、諸説があるが、砂糖の代名詞でもあった。

二、長崎の料理はなぜ甘い
長崎に入港した唐船や南蛮船の人たちの影響や鎖国時代のオランダ人との交流により、砂糖を多く使った各国の料理が家庭に持ち込まれている。現在、これらの料理は長崎の郷土料理になり、引き継がれている。

長崎天ぷらは、衣に砂糖などを入れて味をつけ、天つゆなしで冷めても美味しい。

浦上そばは、豚肉と野菜の油炒めだが、砂糖を加えて味をつける。

べんさし（紅差し）の南蛮漬は、砂糖入りの甘い



浦上そば

南蛮酢に浸ける。長崎の正月料理には欠かせない。ヒリュウズ（飛龍頭）は、魚のすり身に豆腐や人参、木耳などを加え、砂糖で味をつけて揚げる。江戸に伝わり、雁の肉に味が似ているところから「がらんもどき」と名付けられる。

カステラかんぼこは、卵とすり身を混ぜ合わせ、砂糖で味をつけ焼いて巻いたもの。江戸にもたらされ、姿、形が粹な伊達者に似ているところから伊達巻と名付けられる。

十六寸豆の煮豆は、砂糖を入れて甘く煮た豆の上には砂糖をかける。長崎では白隠元豆のことを十六寸豆とよぶ。

ざぼん漬は、ざぼんの皮に砂糖を加えて煮る。更に、煮た皮に砂糖をまぶす。



伊達巻

三、キリスト教信者獲得に砂糖が活用
宣教師のルイス・デ・アルメイダは、西洋医学を最初に日本に伝え、布教と同時に医者としても活躍した人物である。当時、砂糖は「喉によいなめる薬」であった。

また、永禄一二年（一五六九）イエズス会宣教師ルイス・フロイスが、キリスト教布教の許しを得るため、織田信長に謁見した際、金平糖の入ったフラスコ（ガラス瓶）を贈っている。

寛永二年（一六二五）刊の小瀬甫庵著「甫庵太閤記」にはポルトガル人宣教師の布教の方法について次のように記されている。

「上戸にはチンタ（赤ワイン）、ブドウ酒、ロウケIIガネフ（酒類の一

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています



種)みりん酒などでもてなした。下戸にはカステラ、ポウロ、カルメイヤ、アルヘイトウ、コンペイトウ、ビスカウト、パンなどでもてなした。」



カステラ

四、長崎と砂糖の関係
ポルトガル船は平戸来航から航禁止までの八五年間(一五五〇〜一六三九)、キリスト教の布教や砂糖などの貿易を行った。鎖国時代の長崎貿易で輸入のトップは砂糖であった。船底にいくつも積み重ねられた砂糖袋は、船の安定を保つためのバラスト(重し)の役目も果たした。

引がなされる。砂糖は長崎会所が一括購入、その後、入札により国内の商人に販売された。これとは別に砂糖が市中に出来るルートに「こぼれ物」と「貰い物」があった。

「こぼれ物」は、運搬の際などにこぼれた砂糖のことで、その売買利益は人夫たちの役得とされた。そこで袋を故意に破ってこぼすことが横行、天明四年(一七八四)その売買は禁止された。

丸山遊女などがもらう砂糖を「貰い物」といい、これも長崎会所で入札が行われ、それぞれにその代銀が渡された。長崎の四福寺は興福寺、福濟寺、崇福寺、聖福寺であるが、この四福寺には、唐船より莫大な量の砂糖が寄進され、これを「贈砂糖」といった。その一部は長崎街道を通り、黄檗山万福寺(京都府宇治市)に運ばれた。

砂糖の文化が伝わったので、長崎街道は「シュガーロード」ともよばれる。令和二年(二〇二〇)六月に「砂糖文化を広めた長崎街道」シュガーロード」が日本遺産に認定された。

五、おわりに
筆者はもうすぐ米寿を迎えるが、小学三年生の時に長崎で被爆した。当時は食糧難時代で砂糖なども配給だった。母は砂糖の代わりに甘薯を使った。二度とこのような時代にならないことを願う。疲れたときに甘いものを食べると落ち着く。それは脳内の神経伝達物質の一つであるセロトニン(幸せ)が増加し、他の神経伝達物質であるドーパミン(喜びや快楽)やノルアドレナリン(恐れや驚き)などの情報をコントロールし、精神を安定させるからである。



桃カステラ

今年も雛まつりの「桃カステラ」で健康寿命を延ばしたように思われる。

第五回長崎学公開講座 第一部発表要旨 新出資料「川原慶賀筆」万屋町鯨の潮吹き図」について

原田 博二

一、はじめに
昨年一〇月、ライデン国立世界博物館(以下「世界博物館」と記述)の学芸員(博士)ダン・コック氏より川原慶賀筆「万屋町鯨の潮吹き図」(以下「鯨図」と記述)の画像データ」を頂戴した。



写1「鯨図」

二、御門長屋敷敷
「鯨図」(写1)は、万屋町のくんちの演し物を描いたもので、制作年は一八二〇年から三〇年頃

と考えられる。江戸後期の踊町は、御供町と呼ばれたように九月九日の渡御(お下り)と一日の還御(お上り)は、露払いと呼ばれた丸山町と寄合町を先頭に一一か町の踊町が三体の神輿の行列を先導した。

画面はその万屋町の行列の部分で、傘鉦を先頭に五隻の捕鯨船、曳物の鯨、囃子方の納屋と続くその行列は、堂々たる建物の前を、画面の左から右、すなわち東から西に移動している。

ちなみに背景の堂々たる建物は、長崎奉行所西役所の表門長屋①である。ということは、この「鯨図」は、九月九日の渡御の日、西役所の前を大波止の御旅所に向かう万屋町の行列を描いたものである。

『長崎奉行所分類雑載』によると、長崎奉行所では毎年九月九日と一日の両日、立山役所の表門前に御門前敷敷を、西役所の表門長屋に御門長屋敷敷を設け、留守居と呼ばれた各藩の聞役たちをくんち見物に招待した。その様子を描いたのが川原慶賀筆「くんち図」(写

2・世界博物館所蔵)である。同図は、一日の還御の様子を描いたもので大勢の観衆のなか丸山町の本踊(小舞)が披露されている。



写2 川原慶賀筆「くんち図」

画面の中央が岩屋山②、左側が西役所の御門長屋棧敷③、ということは東側から西役所の前を見た図である。「鯨図」の画面の背景にも御門長屋棧敷が描かれているが、よく見ると、聞役たちは建物の外に作られた棧敷ではなく、表門長屋から直接くんちを見物しているようである。というのには御門長屋棧敷は、くんちの時だけ設けられる御門前棧敷と違

って、表門長屋の漆喰の白壁下の羽目板の部分④が突上げ戸形式で自由に開閉でき、開くと棧敷として使用できたのである。ということは長崎奉行所では、一年にたった二日、それもくんちの時だけの使用であるが、それでも表門長屋を棧敷に使用できるような構造にしていたのである。さらには棧敷の前の袴姿の男性⑤は、前固(警備)の当人町の日行使(下級の地役人)で、これも御門前棧敷は四人、この御門長屋棧敷は五人と決まっていた。

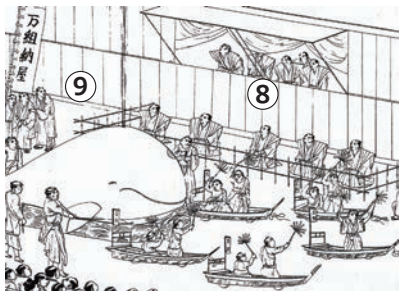
三、鯨の潮吹き

鯨が潮(水)を吹き上げる様子は、現在でもこの鯨の潮吹きの見所の一つである。画面にも二筋の潮が吹き上がり頂点でぱつと開く様子が描かれているが、これに驚いたのか、どうもく見物の人たち、さらには日行使や根曳衆が描かれていて、この「鯨図」の中心となっている。ところで前固の右から五人目の日行使の席⑥は、曳物鯨の陰になっていて、画面からではこの日行使

が座っているかどうか判断できない。そこで日行使が潮が降りかかるので、濡れないように持ち場を離れていたとしたらいかがであろうか。写3の大口を開けて見物する袴姿の男性⑦がそ



写3 鯨図(部分)



写4 「ニッポン」の挿絵「諏訪明神のお祭」(部分)

うであるが、「ニッポン」の挿絵「諏訪明神のお祭」(以下「挿絵」と記述・写4)には日行使⑧は五人とも前固の席に座り、⑨のところには袴姿の男性は見えないのである。そこでこの袴姿の男性を日行使と考えたのであるが、この男性の着衣の色が他の日行使の着衣の色と違うこと、傘鉾に付き添う万屋町の役員の着衣の色と同系統であることなどから、この大口を開けた袴姿の男性⑦は、同町の役員と考えられる。

四、結び

この「鯨図」は、くんちを嬉々として楽しむ人々の表情が一人一人実に緻密に描かれている。さらには御門長屋は、羽目板の部分を開くと、棧敷として使用できたのである。そしてこの御門長屋の突き上げ戸の様子が描かれているのは、現在のところこの「挿絵」と「くんち図」「挿絵」だけである。このようなことからこの「鯨図」は、くんちの資料として、さらには長崎奉行所の資料として実に貴重と考えられる。

第四回長崎学公開講座
第二部発表要旨
高島秋帆と二つの上書

野田 和弘

高島秋帆は二つの上書を書き残している。

天保十一年(一八四〇)秋帆は、前年勃発したアヘン戦争を契機に、西洋式砲術による国防が重要で緊急であるとの意見書を、長崎奉行田口嘉行に提出した。これが一つ目の「天保上書」である。田口は秋帆の意見書を老中水野忠邦に提出。評議の結果、徳丸ヶ原(現・東京都板橋区)で、高島流砲術の演習が行われ、高島流砲術は全国に広まっていた。



高島秋帆紀功碑(東京都板橋区・松月院) 日宇孝良撮影

しかし天保十三年(一八四二)秋帆は、謀反の疑

いで捕えられ、武蔵国岡部藩(現・埼玉県深谷市)に預けられたが、嘉永六年(一八五三)に赦免された。幕府は秋帆を、葦山代官江川太郎左衛門の手付けとして召し抱え、江川の江戸湾の台場築造の補佐を命じた。

この年、幕府はアメリカの開国要求に対し、諸侯を含め幅広く意見を求めていた。赦免後これを知った秋帆は、ぜひ自分の考えも上申したいと思いい書き上げたのが二つ目の「嘉永上書」である。

その内容は諸外国の軍事、経済、外交政策ひいては文化まで書かれている。特に外国貿易については、長崎町年寄として、長年貿易を取り仕切ってきただけに、実際の例をあげて具体的、論理的に述べている。そして鎖国攘夷を続ければ国の存亡に關わりと、開国通商策を述べている。他の意見書のほぼ全てが、短絡的な鎖国攘夷論であっただけに、秋帆がいかに問題の本質を正確に捉えていたかが分かる。

「嘉永上書」の日付は、嘉永六年一〇月となっており。赦免されたのが同

年八月なので、わずか二ヶ月で書き上げたことになる。秋帆がいかにこの件に心血を注いだのかが分かる。

意見書の提出について、江川は赦免されたばかりの秋帆の身を案じ、暫く待つように忠告したが、秋帆の決心は固かった。そこで江川も意を固め、自らの意見書も添えて、老中阿部正弘に提出した。



高島秋帆墓(東京都文京区・大田寺 日守孝良撮影)

その後、秋帆は幕府講武所の砲術師範役まで勤めたが、慶応二年(一八六六)長崎に二度と戻ることなく、六九歳で江戸で没した。

参考文献
石山滋夫『評伝高島秋帆』葦書房一九八六年

第五回長崎学公開講座 第二部発表要旨

二つの長崎ぶらぶら節

大田 由紀

長崎の丸山東検番の芸妓愛八を主人公にしたなかにし礼の小説「長崎ぶらぶら節」は、映画やテレビドラマ、舞台化もされ、愛八は全国的に有名になった。

しかし、ぶらぶら節は愛八ばかりでなく、町検番の凸助(でこすけ)もレコードに吹き込んでいる。現在歌い継がれている歌は凸助盤の歌詞と節回しに近い。

大正から昭和の初めにかけてラジオと蓄音機の出現を背景に、各地の民謡を掘り起こそうとする新民謡運動が起こった。

ニッポノホンレコード(日本コロムビアの前身)が町検番の凸助の唄で「長崎ぶらぶら節」を発売したのは昭和五年(一九三〇)九月、長崎名物はたあげ盆祭りで始まるなじみの歌詞である。三味線の伴奏は同じく町検番の一二(いちじ)。長崎人では初めてのレコーディン

グであった。二人はレコード芸者といわれ地元で大人気、レコードも大いに売れた。

当時凸助(本名、山本タマ)は三〇歳。芸達者で日舞、鳴物は名取。特に常磐津は名人といわれた三歳に入門、常磐津喜三松の名をもらい、大正一四年(一九二五)東京放送局(のちのNHK)のラジオ放送開始のときは、師匠とともに愛宕山から放送するほどの力量があった。その評判が東京のレコード会社にも伝わっていたのであろう。



町検番凸助(個人蔵)



東検番愛八(牟田口金太編輯『奈雅瑛奇』れなせんさ會 1932年)

その後ビクターレコードは東検番の愛八(本名、

松尾サダ)に声をかける。愛八は凸助とは母娘ほどの年の違う五〇代後半のベテランの地方(じかた)であった。三味線の弾き語り、嘉永七年 甲寅の年々という歌詞と、独特の節回しで吹き込んだ。

昭和六年(一九三一)五月に発売された愛八盤は「ぶらぶら節」、愛八を主人公にした小説「長崎ぶらぶら節」と同じタイトルは凸助盤である。

当時、長崎の花柳界は芸どころとして知られ、特に町検番の「町芸妓」と東検番の「山の芸妓」は、互いに芸を競い合っていた。大正一四年(一九二五)には両検番合わせて二五〇人余りの芸妓衆(長崎では「げいこし」とよぶ)が在籍していたといわれる。

二つの唄には町検番と東検番、そして二つのレコード会社のライバル意識とこだわりが表れているといえる。それぞれを聴き比べると、テンポが早くメリハリが利いた凸助盤に比べ、愛八盤はゆったりとした節回しで情緒たっぷり、それぞれ味わいがある。